

せい しょ ぼう けん もの がたり 聖書の冒険物語

だい ごう
第2号

ねん がつよつか
2021年6月4日

てん ひ くだ 天から火が下る

れつおう きじょうだい しょう せつ さいわ
列王紀上第18章-1-45節の再話

よげんしゃ
預言者エリヤがアハブ王の宮廷に立ち、
これから大いなる干ばつが起こると
おお かん かん ばつ お
告げてから、3年が経っていた。エリヤは
つ ねん た
その期間、始めはケリテ川のほとりで
そのきかん はじめ は けりてがわ
暮らし、その後はザレパテのやもめの
く ごと
もと暮らしした。この長い間、エリヤは
もと なが あいだ
幾度となく、神は御自分の民のために、
いくど なく かみ ごじぶん たみ
次は何を御計画なのだろうと思ったこと
つぎ なに ごけいかく おも
だろう。イスラエルの民は、果たして
たみ は
まな きょうくん
学ぶべき教訓を学んだだろうか？ もう
くうぞうれいはい けつべつ き
偶像礼拝と決別する気になっただろうか？
しゅ
主は、いつかはこの干ばつを止められる
と
だろう。だが、いつ、どのように？

すると、主がエリヤに言われた。
「行って、あなたの身をアハブに
い
しめ あめ ち ふ
示しなさい。わたしは雨を地に降らせる。」

エリヤはすぐさま、ザレパテから
250kmほど南のサマリヤに向けて、
しゅばつ とうちゅう おう
出発した。その途中で、アハブ王の
いえ
家づかさオバデヤに出会った。
オバデヤは、干ばつから生き延びた
かん い の
うま ぼくそう ち さが
馬やラバのために、牧草地を探して
いた。オバデヤは、天の神に忠誠を
てん かみ ちゅうせい
尽くす、数少ない指導者の1人だった。
つ かずすく し どうしや ひとり
じょおう
女王イゼベルが神の預言者達を
よげんしゃたち
みなごろ とき
皆殺しにしようとした時には、
かかん にん ほらあな かく
果敢にも、その100人を洞穴に隠して
やしな ちゅうせい ひようめい
養い、神への忠誠を表明したのだ。

エリヤだと分かると、オバデヤは
わ
しゅ さげ しゅ
ひざまずいて叫んだ。「わが主エリヤよ、
ほんとう
本当にあなたなのですか？」

エリヤは言った、「そうです。行って、

あなたの主人に、エリヤはここにいると
しゅじん
つげなさい。」

オバデヤは答えた。「それはでき
こた
ません。アハブ王は、国中であなたを
おう おう くにじゅう
探し回っています。あなたを見かけた
さが まわ
という偽りの報告が多数ありましたが、
いつわ ほうこく たすう
それはただ、王の怒りに油を注ぐだけで
おう いか あぶら そそ
した。もし私がアハブ王に、あなたが
わたし
ここにいると告げ、その後あなたが
つ あと
またもや姿を消してしまったら、王は
すがた け
私を殺すでしょう。」

わたし つか ばんぐん しゅ い
「私の仕える万軍の主は生きて

エリヤについて、もっと知りたくなかったかな？
よげんしゃ
預言者エリヤについてのもう1つの物語、
ひと ものがたり
わたし
「私のためにパンを作って下さい」を読み逃さないでね。
つく くだ よ のが

エリヤはひるまずに、こう答えた。
「私がイスラエルを悩ますのでは
ありません。あなたと、あなたの
父の家が悩ましたのです。あなたがたが
主の命令を捨て、バアルに従ったため
です。それで今、イスラエルのすべての
人、および、イゼベルの食卓で食事する
バアルの預言者450人、ならびに
アシラの預言者400人をカルメル山に
集めて、私の所に来させなさい。」

神は、エリヤに御計画を示されて
いた。いよいよ決着の時が来たのだ。
民は皆、これを最後に、きっぱりと
決断しなければならない。自分達は、
天の神に仕えるのか、それとも、
国中に建てられた偶像でできた
偽物の神に仕えるのか？ そこで王は
国中に使いをやって、カルメル山に
集まるようにと、民に呼びかけた。

まもなくすると、男も女も子供も、

何千人もの人々がやって来た。一体
何のために集まるのか、分かって
いた人は1人もいなかった。ただ、
集まるようにと王に命じられて
やって来ただけなのだ。エリヤも
そこにいるとのうわさも出回って
いたが、だれもそれを信じなかった。
ここ3年の間に、預言者についての
うわさは何度もあったが、実際に
現れたことは1度もなかったからだ。
王自身がずっと、彼を探し回って
いたではないか？

人々は押し合いへし合いになり
ながら、カルメル山の頂上へ
向かった。一晩の内に山の斜面は
人々で埋め尽くされ、皆、夜明けを
待った。

夜明けになると、だれかが叫んだ。

「あそこだ！ あそこにいる！
エリヤが現れたぞ！」

情報はまたたく間に、待って
いた群衆の間に広がった。人々は
皆、王に挑戦した男を見ようと、
目を凝らした。子供達は皆、その
状況をよく見ようと、前の方に
押し寄せた。

「静かに！」と、だれかが
叫んだ。「シーッ！ 彼が話して
いる。エリヤが話している。」

群衆が静まり返った。すると、
山頂から大きな力強い声が響いて
きた。アハブ王の宮廷で聞いたのと
同じ、力強い声だ。

「あなたがたは、いつまで
二つのもの間で迷っているの
ですか？ 主が神ならば、それに
従いなさい。しかしバアルが
神ならば、それに従いなさい。」
と、預言者は叫んだ。

民はひとことも答えなかった。

エリヤは話し続けた。「私は、
ただ1人残った主の預言者です。
しかし、バアルの預言者は450人
います。我々に2頭の牛を下さい。
そして、1頭の牛を彼らに選ばせ、
それを切り裂いて、たきぎの上に
載せ、それに火をつけずにおかせ
なさい。私も1頭の牛を整え、
同じようにしましょう。バアルの
預言者はバアルの名を呼びなさい。
私は主の名を呼びましょう。そして、
火をもって答える神を、神と
しましょう。」

「結構。それがよかろう。」と、
民は答えた。敵対する神々の力の
対決を目の当たりにできると、
興奮していた。見物する大衆の
関心度は、いよいよ増してきた。

エリヤはバアルの預言者達に
向かって言った。「あなたがたが
初めに1頭の牛を選んで、それを
整え、あなたがたの神の名を呼び
なさい。そして、火をもって答えて
もらいなさい。」

バアルの預言者達は、バアルこそ
地上で最強の神であることを証明
できるいい機会だと、喜んで牛を
選んで切り裂き、用意した祭壇の
たきぎの上に載せた。そして、火を
送って供え物を焼いて下さるよう、
バアルを呼び求めた。

「バアルよ、答えて下さい！」

彼らは叫びながら、祭壇の周りで
踊り始めた。

だが、バアルからはなんの返事も
なく、火もなかった。

朝から昼までずっと、彼らは
踊ったり、気が狂ったように叫び
続けた。昼になり、エリヤは彼らを
あざけて言った、「もっと大声を
あげて呼びなさい！ 彼は旅に
出たのか、または眠っていて、
起こされなければならないのか。」

そこで彼らは大声に呼ばわり、
刀で身を傷つけ、血をその身に

流すに至った。こうして昼が過ぎ、
夕方になって、日が沈み始めた。

しかし、バアルからの返事は
なかった。

しばらくすると、バアルの
預言者達の失敗を目のあたりにし、
完全に嫌気が差していた人々に
向かって、エリヤが再び口を開いた。

「私に近寄りなさい！」と
エリヤが言ったので、民は皆、
彼に近寄った。エリヤは、以前
山頂に作られた、こわれて忘れ
去られていた主の祭壇を繕った。
イスラエルの部族の数に従って

12の石を取り、その石で祭壇を
築き、祭壇の周囲にみぞを掘った。
それから牛を切り裂いて、たきぎの
上に載せた。

「四つのかめに水を満たし、
それを供え物とたきぎの上に注げ。」
とエリヤが言うと、人々は驚いた。

それを見て笑った人もいただろう。
「そんなにたくさんの水をかけて、
それが焼けるとでも思っているの
か？」例えエリヤがそれを耳に
したとしても、気にも留めなかつた
だろう。

エリヤはまた言った、「もう一度、それをせよ。」人々はもう一度、そうした。

すると、またエリヤが言った。「三度目をせよ。」人々が三度目にそれをすると、供え物は水に浸り、周りのみぞにも全部、水が満ちた。これでもう、エリヤが自分で火をつけたなどと言える人はいないだろう。

エリヤが声を張り上げて祈り始めると、突然、群衆が静まり返った。すべての人が耳を傾けた。叫ぶのを止めていたバアルの預言者達でさえもだ。

「アブラハム、イサク、ヤコブの神、主よ。イスラエルでは、あなたが神であること、私があなただけのしもべであって、あなたの言葉に従ってこのすべての事を行ったことを、今日知らせて下さい。主よ、私に答えて下さい、私に答えて下さい。主よ、この民に、あなたが神であることを知らせて下さい！」

エリヤが祈り終えもしない内に、空からパッと火が下って、供え物と、たきぎと、石と、ちりとを焼きつくし、また、みぞの水をすべて、なめつくした。それは、全くもって驚嘆すべき、決して忘れられない眺めだった！

恐れおののいた人々は、地に顔を伏せて叫んだ。「主が神である、主が神である！」

エリヤは、バアルの預言者を1人残らず捕えさせ、キシオン川に連れ下って粛清した。彼らの邪悪さから国を清めるためだ。

エリヤは、来たるべき雨に備えるようにとアハブに指示した後、カルメル山の頂に登り、祈りの内に頭をたれた。

「上って行って、海の方を見なさい。」と、エリヤはしもべに言った。

しもべはもどって来ると、「何もありません。」と言った。

エリヤは「もう一度行きなさい」と言って、それが7度に及んだ。

7度目にしもべがもどって来ると、こう言った。「海から人の手ほどの小さな雲が起っています！」

すると間もなく、雲と風が起って空が暗くなり、大雨が降ってきた。エリヤのたゆまぬ祈りが答えられた瞬間だった。

このすごい聖書の登場人物について、もっと読んでみよう。

「聖書の偉人：エリヤ」を見てね。